

私の視点

Delayed dermographic urticaria ～皮膚の反応閾値の変動により現れる蕁麻疹？

秀 道広(広島大学皮膚科学教室教授)

機械性蕁麻疹では、皮膚を擦過することで擦過部位に一致して紅斑と膨疹が現れる。2枚の写真は30歳の女性に現れた皮疹で、図1は彼女が自宅で撮影した。私が診察を始めたときには図2の胸部に皮疹はなかったが、10分程度の診察の間にいつのまにか線状の紅斑が現れ、ほどなく消腿した。その間、患者が胸部を擦過する行動はなかった。

Delayed dermographic urticariaは、1950年にKalzらがDelayed and persistent dermatographiaとして報告し(Arch Dermatol Syphilol 61:772, 1950)、成書には遅延性圧蕁麻疹に合併する例が多いとの記述がある(Czarnetzki BM: Urticaria, Springer-Verlag, Berlin, 1986)。物理性蕁麻疹の皮膚の反応閾値は人により異なるが、その皮疹は遅延性圧蕁麻疹を除いてほとんどは刺激負荷後数分以内に出現し、数十分以内に消腿する。しかし、この症例では明らかな機械的擦過に続くことなく線状の膨疹が出現し、十数分の経過で消腿した。同部位の皮疹出現に先行して機械的刺激があったことは確認できていないが、くっきりした線状の皮疹から、この部位が機械的に擦過されていたことは明らかであろう。ではこの時間経過をどう考えればよいであろう？ 皮膚の擦過により多段階の刺激応答が進行し、最後にマスト細胞が脱顆粒した可能性もあるが、そうであれば、もう少し空間的に反応が拡散し、このように明瞭な境界は現れないのではないか？むしろ、皮膚全体の閾値が低下し、刺激を受けた局所が炙り出されたと考えるほうが自然ではないか。紙に文字を書くことに例えれば、機械的擦過はみえないインク、皮膚は白い紙で、通常われわれがみる機械性蕁麻疹は書いた端から透明なインクが炙り出される文字に該当する。健常人ではインクがついても何もみえず、この症例のように後から紙が熱せられるとインクが炙り出されるという仕組みである。一般に、われわれは蕁麻疹の皮疹を誘発する特異的刺激が目が行きがちであるが、その背景に特異的刺激に対する過敏性あるいは膨疹を形成する反応閾値の低下があり、抗ヒスタミン薬を含む蕁麻疹の治療薬はその閾値を上げる役割をしている可能性があると思う。



図1 上腕部の臨床像。患者が自宅にて撮影



図2 胸部の臨床像。筆者が初診時に撮影